氏　　名	王　丹彤
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	文　学
学位授与番号	博甲第 6675 号
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 （学位規則４条第１項該当）
学位論文題目	語彙統語論的なヴォイスについての研究 ―を格の漢語動名詞と動詞からなる語結合をめぐって―
学位論文審査委員	教授　宮崎　和人　　教授　栗林　裕 准教授　片桐　真澄　　准教授　中東　靖恵

学位論文内容の要旨

現代日本語において、動作名詞と動詞の語結合には、「計画をきく」「生活をかんがえる」のような、自由な意味を保つ連語（＝自由結合）のほかに、「調査をおこなう」「評価をえる」のような、語彙的意味を名詞が担い、動詞が主に文法的な機能をはたす機能動詞結合（＝非自由結合）がある。村木（1991）『日本語動詞の諸相』では、後者における「おこなう」「える」のような動詞を機能動詞と呼んだ。機能動詞結合は、ヴォイス、アスペクト、ムードといった文法的カテゴリーの表現手段となる。また、こうした機能動詞結合は、文法的カテゴリーの中心的な表現手段である形態論的な表現手段に対して語彙統語論的な表現手段と見ることができる。形態論的な表現手段についてはすでに多くの研究があるが、こうした語彙統語論的な表現手段の研究はほとんど手つかずである。本研究では、能動・受動、他動・使役といったヴォイスにかかわる語彙統語論的な表現手段のうち、を格の漢語動名詞と和語動詞の語結合について、代表的な事例を取り上げて考察したものである。

本研究は、七つの章で構成されている。第一章～第三章は序論であり、本研究に関する基本的な概念や研究史を概観したうえで、本研究の位置づけを明らかにする。第四章～第六章は本論であり、漢語動名詞と和語動詞の語結合による語彙統語論的なヴォイス表現の事例のなかから代表的なものをいくつかを取り上げて、BCCWJから収集した大量の用例の観察にもとづいて、能動・受動に関するもの（第四章）と他動・使役に関するもの（第五章、第六章）に分けて記述する。第七章では、結論として本研究が明らかにしたことをまとめたうえで、今後の課題を提示する。以下、各章の概要について述べる。

第一章では、まず本論文の目的と構成について説明したのち、日本語の機能動詞研究の先駆者である村木新次郎の記述を取り上げ、その全体像を把握した。続いて、奥田靖雄によるを格の動作名詞と

動詞からなる連語に関する二つのバージョン（60 年版と教育国語版）の比較および村木の機能動詞結合の記述と奥田の連語の記述の照合を行い、機能動詞結合と自由結合や慣用的なくみあわせを区別する上で問題となるケースを明らかにした上で、本論文の立場を表明した。

第二章では、を格の漢語動作名詞と動詞からなる語結合のうち、分類語彙表の「2.30 心」の項目の動作名詞を構成要素とする語結合の用例を現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)から収集し、出現頻度の高い動詞を対象として、それらを構成要素とする語結合を言語学研究会編（1983）の記述と照合し、連語でないものがどのように分布しているかを検討した。

第三章では、本論文の中心的な考察対象である語彙統語論的なヴォイスに関する先行研究（村木氏の機能動詞研究のうちのヴォイスに関する部分）を概観した。語彙統語論的なヴォイスとは、機能動詞結合によってヴォイス的な意味を表すものである。そして、そこではいくつかのヴォイス的な意味が取り出されているが、形態論的なヴォイスとの関係やヴォイス表現としての特質などについてはまだ検討されていないことを指摘した。

第四章では、本論の最初のテーマとして、能動・受動のヴォイス対立に関する考察を行った。対象は、機能動詞結合による語彙統語論的なヴォイス表現である「VN をあたえる」「VN をうける」である。ここでは、まず、研究対象を明らかにした上で、この結合が表すヴォイス的な意味には、能動・受動、自動・他動、他動使役があることを確認し、そのうちの能動・受動のヴォイス対立を構成するものについて、形態論的なヴォイス表現と比較しながら考察した。その結果、仕手・受け手の名詞クラスおよび格表示、伝達内容の明示の有無や表し方、修飾要素などの点で、語彙統語論的なヴォイスは形態論的なヴォイスには見られない特徴を多数有することが明らかになった。

第五章と第六章は、使役・他動に関する考察を行った。まず、第五章では、人から人へのはたらきかけを表現する「VN をまかせる」を取り上げて記述する。ここでは、先行研究（佐藤論文および早津論文）における使役文の記述を参考にしつつ、「まかせる」文のヴォイス性について考察した。「まかせる」文には、使役文に言い換えられるものが多いが、無条件で形態論的な使役文と同一視せず、あくまでも「動詞の表す動きの関与者の統語論的な機能と意味論的な役割の相互関係の体系」というヴォイスの本来の定義にしたがって、「まかせる」文を六つのタイプに分類し、それぞれのヴォイス性について考察した。

第六章では、「VN をもたらす」を取り上げて記述した。ここでは、まず、この語結合が成立するための語彙的な条件を明らかにし、続いて、「もたらす」文の二タイプ（他動使役文にあたるものと他動詞文にあたるもの）および対象の表し方について記述し、さらに、競合する他動詞文との違い（主語の名詞クラスと受動化）や評価性について考察した。

第七章では、前章までの考察結果をまとめて、今後の課題を提示した。

学位論文審査結果の要旨

語結合には自由結合と非自由結合とがあり、後者の代表には慣用句があるが、自由結合とも慣用句とも言えない語結合として、動詞が実質的な意味を名詞に預け、動詞自体は文法的な意味・機能を担

う機能動詞結合がある。日本語の機能動詞結合については、先駆者である村木新次郎氏によって基礎的な記述が行われているが、自由結合との境界や機能動詞結合の文法的な側面（文法的カテゴリーや形態論的な表現手段との関係）についてはまだ多くの課題が残されている。申請者の博士論文は、それらの課題に果敢に取り組んだものであり、を格の漢語動名詞と和語動詞からなる語結合を文法的な意味の表現手段の一種と見なし、特にヴォイスに関係するものについて、自ら作成した用例データベースを活用して、記述的研究を行ったものである。

本論文の特長と学術的意義として、審査会では以下のことを確認した。

本研究は、語結合とは何かという統語論の基本問題を考えるところから出発し、機能動詞結合という特殊な語結合に注目する。この結合は、その重要性にもかかわらず、日本語学ではほとんど研究されてこなかったものである。申請者は、機能動詞結合の研究史を描こうとするが、先行研究があまりにも少なく（ほぼ村木氏のもののみ）、自由結合の研究（すなわち連語論）に立ち戻って、機能動詞結合の位置を探ろうとする。そして、連語の記述の中に、機能動詞結合の一部が混在していることを指摘しつつ、それらを区別しようとする意識があることにも注目する。また、実際に動作名詞と結合する動詞を分類語彙表と現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を使って収集し、それらの連語論での取り扱いについても調べている。こうした一連の作業からなる序論（第一章から第三章）は、本論部分の記述に直結するものではないが、本研究が言語研究全体の中でどのような位置をしめ、どのような意義をもつのかを理解する上で重要なパートとなっている。

本論（第四章から第六章）では、機能動詞結合と最も関係の深い文法的カテゴリーとしてヴォイスを取り上げ、代表的な機能動詞（あたえる・うける・まかせる・もたらす）について、形態論的なヴォイス（スルーサレルなど、動詞の文法的な形によって表されるヴォイス）の分類にそって、能動・受動・使役・他動といった枠組みで記述している。村木氏の記述に比べて取り上げている機能動詞の範囲が狭いのは、本研究では一般性や生産性が高いもの（結合する動名詞の範囲が広いもの）に限定しているからである。対象とする機能動詞の数が多くないかわりに、それらの動詞を構成要素とする機能動詞結合のBCCWJにおける数万例に及ぶ全用例を抽出し、データベース化したうえで考察を行っているため、用例の分布などの実態を踏まえた実証性に富む研究になっている。

本論において取り上げられる個々の機能動詞結合の使用実態にもとづく記述は、いずれも本研究が初となるものである。大量の用例の調査によらなければ決して明らかにできない様々な興味深い事実が本研究によって次々に明らかにされている。例えば、能動・受動を扱う第四章では、能動・受動の用例の比率が形態論的な手段（スルーサレル）と語彙統語論的な手段（VNをあたえるーVNをうける）ではかなり違うという指摘に始まり、仕手・受け手の名詞クラスや格表示、伝達内容の明示の有無や表し方、修飾語や規定語の共起、文章のジャンルにわたって、二つの手段によるヴォイス表現の特徴の違いを的確に提示し、語彙統語論的な手段の存在理由を明らかにしている。「VNをまかせる」を扱う第五章では、形態論的な手段による使役文に関する先行研究の分析法（使役の源泉・目的に着目する）を援用しつつも、「VNをまかせる」を使役文と同一視せず、純粋に動詞の表す動きの関与者の役割を観察することを通して、「VNをまかせる」のヴォイス性を六つのタイプに分けて取り出し、使役文と類似する部分と相違する部分を明示的に説明することに成功している。「VNをもたらす」を扱う

第六章では、これが機能動詞結合と言えるかについては慎重な態度をとりつつも、実際の記述を通して、ヴォイス（他動構造）の語彙統語論的な表現手段と見ることの有効性を示している。ここではまず、この語結合が成立するための語彙的な条件を押さえ、次に、「もたらす」文には使役文に対応するものと他動詞文に対応するものがあることを指摘したうえで、対象の格表示の分布とその選択要因や競合する他動詞文との違いを明らかにし、さらに評価性についても言及するなど、注目すべき事実を明るみにだしている。

上記のような学術的な意義のほか、審査会では、丹念に記述され、論文として大変よくまとまっていること、コーパスを最大限に利用し、言語事実を効果的に取り出せていること、地道に研究活動を積み重ね、査読付きを含む６本の個別論文を公表していること、などが評価された。一方、主要な動詞を押さえているとはいえ、ごく一部にすぎず、重要なもので取り上げられていないものもあるのではないかということや、参照している文献の範囲（量ではなく分野）がやや狭いのではないかということなども、審査会では指摘された。また、同じ観点から他言語にもぜひアプローチしてほしい、機能動詞結合の発展の過程を歴史的に見てほしい、といった要望もあった。まだまだ発展の余地を残しているが、それはこの研究の新規性と可能性の大きさによるものと言える。

以上のような議論の末、審査会では、全員一致で本論文を博士学位授与にふさわしいものと判断した。